

桜井南部の歴史街道を歩く

歴史文化クラブ

桜井駅の南に、外山茶臼山古墳、メスリ山古墳の巨大な前方後円墳があります。三輪山西麓北、南から桜井南部にかけて①箸墓古墳、②西殿塚古墳、③外山茶臼山古墳、④メスリ山古墳、⑤行燈山古墳、⑥渋谷向山古墳の順に造られ、初期大和王権の成立に深くかかわった地域といわれています。

日本書紀に、(第17代)履中天皇(5世紀前半)、(第22代)清寧天皇(5世紀後半)、(第26代)継体天皇(6世紀中期)、(第31代)用明天皇(6世紀後半)の各宮が「磐余」に置かれたとあります。

聖徳太子が幼青年期の約20年間を過ごしたといわれる上之宮遺跡も住宅地の一角に保存されています。

また、推古天皇(592~628)の死後、蘇我蝦夷と共に舒明天皇擁立に尽力した阿倍倉梯麻呂や、蝦夷討伐や百済救援の将軍の阿倍比羅夫を輩出した軍事氏族の阿倍氏の拠点でもありました。

阿倍氏の活動は推古記から舒明記にかけて顕著であり、孝徳朝では左大臣として政権中枢にかかわりを持つが、藤原氏の台頭とともに勢力を失い、奈良時代以降は中央政権から離れ、北陸・東国方面の経営に進出しました。遣唐使留学生で唐朝に仕え長安で客死した阿倍仲麻呂や平安時代の陰陽師の阿倍清明も阿倍氏の流れをくんでいます。

そして、遣唐使の派遣や唐使の来朝等により、仏教が東アジア全体を覆うすぐれた宗教であり文化であることに気づいた舒明天皇が、蘇我氏の影響を排除するために大王家の威信をかけて、創建時の法隆寺や飛鳥寺を遙かに凌ぐ壮大な規模で企画建立し、皇極(斉明)、天武、持統、文武、元明、元正、聖武の歴代天皇によって建立、移築された官営寺院が百済大寺であります。吉備池廃寺跡を訪ね、百済大寺から高市大寺、大官大寺、大安寺への変遷を追いながら、当時の国家と仏教について考えてみたいと思います。

《行程》

JR桜井駅前◎(10時10分) ⇒ 若桜神社(桜の井) ⇒ 石寸山口神社 ⇒ 土舞台(桜井公園) ⇒ 草墓古墳 ⇒ 上之宮遺跡 ⇒ メスリ山古墳 ⇒ 阿倍寺跡(阿倍史跡公園) ⇒ 阿倍文殊院◎(文殊院西古墳、文殊院東古墳) ⇒ 吉備池廃寺跡(百済大寺) <昼食> ⇒ 稚櫻神社 ⇒ 磐余池跡 ⇒ 御厨子神社 ⇒ 御厨子観音◎(妙法寺) ⇒ 大官大寺跡 ⇒ 飛鳥資料館◎(入館)
⇒ バスで橿原神宮駅へ(16時解散予定) <歩行距離約7km> ◎印はトイレ有

《実施要領》

- ・日時 3月29日(火)
- ・集合 JR桜井駅改札口前 10時10分集合
- ・携行品 昼食、飲み物、雨具等
- ・世話人 寺田、中井、藤田、古川
- ・申込先 歴文事務局 古川祐司宛
電話・FAX: 0742-44-8621 Email: rekibun@naranature.com

(1) 「桜井」の地名の由来「桜の井」

1600年前、履中天皇（第17代）が井のほとりに桜を植えて、清水を愛でさせられたので「桜の井」と呼ばれ、このあたりが履中天皇の磐余（いわれ）若櫻宮跡ともいわれ、「桜井」の地名の発祥の地といわれています。

『三年冬十一月丙寅朔辛未、天皇、泛兩枝船于磐余市磯池、與皇妃各分乘而遊宴。膳臣餘磯獻酒、時櫻花落于御盞、天皇異之則召物部長眞膽連、詔之曰「是花也非時而來、其何處之花矣、汝自可求。」於是、長眞膽連、獨尋花、獲于掖上室山而獻之。天皇歡其希有、即爲宮名、故謂磐余稚櫻宮、其此之緣也。是日、改長眞膽連之本姓曰稚櫻部造、又號膳臣餘磯曰稚櫻部臣』（日本書紀卷12）

『3年の冬11月の丙寅の朔辛未に、（履中）天皇、兩枝船（ふたまたぶね）を磐余市磯池（いわれいちしのいけ）に泛べたもふ。皇妃と各分ち乗りて遊宴びたまふ。膳臣餘磯（かしわのおみあれし）酒獻る。時に桜の花、御盞に落ちれり。天皇異（あやし）びたまひて、則ち物部長眞膽連（もののべのながまいのむらじ）を召して、詔して曰はく、「是の花、非時（ときじく）来たれり。其れ何処の花ならむ。汝（いまし）、自ら求むべし。」とのたもふ。是に、長眞膽連、独り花を訪ねて、掖上室山（わきがみのむろやま）に獲て、獻る。

天皇、其の希有（めずら）しきことを歎びて、即ち宮の名としたまふ。故、磐余稚櫻宮（いわれわかざくらのみや）と謂す。其れ此の緣（ことのもと）也。是の日に長眞膽連の本姓（もとかばね）を改めて、稚櫻部造（わかさくらべのみやつこ）と曰ふ。又、膳臣餘磯を號（なづ）けて、稚櫻部臣（わかさくらべのおみ）と曰ふ。』

<参 考>その他に磐余の地に宮を構えた天皇

清寧天皇（第22代）（磐余甕栗宮 いわれのみかくりのみや）	⇒	橿原市東池尻町
繼体天皇（第26代）（磐余玉穗宮 いわれのたまほのみや）	⇒	桜井市池之内
用明天皇（第31代）（磐余池邊雙槻宮 いわれのいけのべのなみつきのみや）	⇒	桜井市吉備

(2) 若櫻神社(桜の井)

若櫻神社は、桜井市市谷のほぼ中央西の丘の頂上に南面する閑静な神社で、ご祭神は伊波俄加利命（いはかがりのみこと）です。日本書紀によると、第14代 仲哀天皇の妃である神功皇后が大和国に「磐余若櫻宮」をつくったとあり、この神社のあたりであったと考えられています。

また、第17代 履中天皇が磐余市磯池で遊ばれた際に、桜の花が散りかかる様子を不思議に思われ、長真胆連（ながまいのむらじ）にその所在を尋ねられたところ、脇上室山（わきがみむろやま）に咲いた桜であることがわかり、宮を「磐余若櫻宮」と名付けられたのもこのあたりであったと言われています。

また、脇上室山から桜の樹を等弥郷の清水湧き出る泉のほとりに植えられたことが桜井の名の起こりとされています。なお、「磐余若櫻宮」については、この若櫻神社と桜井市池内の磐余若櫻神社の二つが伝承地になっています。

(3) 石寸（いわれ）山口神社

南面して鎮座する旧村社で式内大社で祭神は大山祇神（オオヤマツミ）。大和六所山口神の一つです。元々社地は社前の前にある菰池（こもいけ）という小さな溜池の南側の丘陵（字丸山）にあったとされています。古い神社で天平2年（730年）の『大倭国大税帳』に石村山口神戸、大同元年（806年）の『新抄格勅符抄』に石村神二戸、貞観元年（859年）の『三代実録』に正五位下などに記録がのこっています。

大和志（享保21年刊・1736年）では双槻（なみつき）神社と呼ばれている事から、用明天皇の磐余池辺雙槻宮（いわれいけべのなみつきのみや）の跡地とする説がある一方、それを否定し当社は元、石寸山の水上にあったので水利に関係していた石寸水分社とする説（大和志科）もありますが近年は桜井市の木材業界の守護神として知られています。

（4）土舞台

日本書紀 推古20年（612年）に百濟の人、味摩之（みまし）が呉で「技楽舞（呉の歌舞）を学び、これを聖徳太子がご覧になって、この地で少年を集めて習わしめたという。土舞台は、初の国立演劇研究所がつけられた所であると伝えられている。

「土舞台」顕彰碑は、桜井市出身の文芸評論家 保田與重郎氏の雄渾な文字をほったものである。

（5）上之宮遺跡

一辺が50メートル以上の柵や溝に囲まれた方形の区画の中に建物が規則的に配置されており、西側から園池遺構が出土した。木簡、琴柱、ベッコウ等の貴重品や、地名から聖徳太子が20年間居所した宮跡と推定される。発掘調査後この園池遺構を埋め戻し、その上に原寸大の遺構を復元している。また、桃やスモモの核が多量に出土したことから周囲には花園があったとみられる。当時の園池としては第1級の規模・格式を持っている。

聖徳太子が幼少・青年期を過ごしたとされる上宮（かみつみや、うえのみや）の名称は、用明天皇の宮の上方に営まれたことに由来すると言われている。『日本書紀』によれば、用明天皇は磐余池の近くに磐余池辺雙槻宮（いわれいけのべのなみつきのみや）を営んだ。雙槻宮の所在が特定できれば、上宮の位置も想定が可能なのだが、実は肝心の雙槻宮の比定地に複数の説がある。桜井市吉備の春日神社付近とする説と桜井市谷の石寸山口神社付近とする説である。このため、上宮の位置がなかなか特定できないでいた。

桜井市は、桜井南部特定区画整理事業にともなう発掘調査を長年実施してきた。1986年から実施した発掘調査では、上之宮地区の桜井商業高校の東で、豪族の居館遺構が発見された。遺構は、なだらかな丘陵の北東斜面にひろがっていた。すぐ東を寺川が流れ、正面には神武伝承で知られる鳥見山や、三輪山がみえる景勝の土地に位置している。遺跡の規模は東西およそ5、60m、南北およそ100mで、その範囲に、当時としては第一級の規模・格式をもった、四面庇（ひさし）付大型建物の居館遺構をはじめ、倉庫群や掘立柱建物が配置されていた。これらの建物をとりまく柵列と溝が東と南側に造られ、西側にはこれらの建物群に付属していたと思われる園池遺構や石組み遺構が検出された。この遺跡は、一辺が約100mの方形区画の中に収まっているところから、6世紀後半から7世紀初頭にかけての豪族居館の跡と推定された。さらに、同時に出土した木簡、琴柱、ベッコウ等の貴重品や、ここの地名が上之宮（うえのみや）であることから、聖徳太子が住んだ上宮の可能性が高く、がぜん世間から注目される遺跡となった。しかし、この地域が古代の大豪族・阿倍氏の本拠に近いころから、阿倍氏の館とする説、あるいは崇峻天皇の宮殿説、渡来系氏族・谷氏の居館説などもある。

（6）阿倍文殊院

645年（大化元）に安倍倉梯麻呂（くらはしまろ）が創建した安倍寺の後身といわれる。安倍氏の氏寺として阿倍仲麻呂や平安時代の陰陽師安倍晴明ゆかりの地としても知られる。

本堂の右に釈迦堂、左に大師堂、本坊、庫裡が並び、庭園を隔てて方丈客殿につらなっている。日本三文殊の一つとして「智恵の文殊さん」で親しまれ、学業成就の祈願に訪れる人も多い。また境内には、金閣浮御堂、特別史跡の西古墳、關伽井古墳もある。春は桜、秋はコスモスなど花の見所も多い。

孝徳天皇の勅願によって大化改新の時に、左大臣となった安倍倉梯麻呂が安倍一族の氏寺として建立したのが「安倍山崇敬寺文殊院」（安倍寺）である。しかし一般的には古来より、日本三文殊の第一霊場（京都府・天橋立切戸の文殊、山形県・奥州亀岡の文殊）「大和安倍の文殊さん」として名高い。

大化元年（西紀 645）倉梯麻呂が創建した安倍寺（崇敬寺）は、現在の寺の南西 300 メートルの地に法隆寺式伽藍配置による大寺院として栄えていた。（東大寺要録末寺章）（現在「安倍寺」跡は国指定の史跡公園として保存されている。）鎌倉時代現地に移転後も、大和十五大寺の一つとして栄え嘉吉元年（1441）この興福寺官務牒疏には当時なお二十八坊の存在が記されており、寺運はなかなか隆盛であったが、永禄六年（1563）二月松永弾正の為に兵火に会い一山ほとんど鳥有に帰する災を受け、その後寛文五年（1665）四月に到って本堂（文殊堂）と礼堂を再建されたのである。現在の本堂は即ちこれで、人母屋造本瓦葺七間四面の建物で前に礼堂（能楽舞台）を従えている。本堂の右に釈迦堂、左に大師堂、本坊、庫裡が並び庭園を隔てて方丈客殿につらなっている。

（7）安倍寺跡（安倍史跡公園）

大化の改新時の左大臣安倍倉梯麻呂の建立と伝えられ、創建は山田寺とほぼ同年代とされている。伽藍配置は、法隆寺式とする考えと、四天王寺式とする考えの二者がある。

安倍寺に関する記録では、平安時代末の「東大寺要録」にある崇敬寺と安倍寺は同じ寺であると考えられ、鎌倉時代の巴文軒丸瓦も出土している。また、鎌倉時代の瓦窯跡も発見されている

< 安倍倉梯麻呂 >

安倍倉梯麻呂、武渟川別（タケナカワカ）の十世孫。舒明天皇の二年（639 年）百濟大寺の造寺司となり、大化元年（645 年）、中臣鎌足や石川麻呂らと、中大兄皇子の下で大化改新の推進を行い、わが国最初の左大臣に任命されている。また娘の小足媛を孝徳天皇の妃とし、有間皇子を儲けていることから新政権の中枢に加えられたと考えられる。大化 4 年（648 年）、内麻呂は四天王寺で仏像 4 体を迎えて法要をとり行った

（8）文殊院西古墳

安倍氏の中で、大化改新後に初めて左大臣にのぼり、5 年後に死去した安倍倉梯麻呂の墓説が有力横穴式石室を持つ古墳の中で、最も整美された切石の石室を持つ。

（9）文殊院東古墳（閼伽井古墳）

古来から閼伽井窟（あかいくつ）と呼ばれ、信仰の対象とされてきた。出土品は不明だが、石室の構造から、谷首古墳より新しく、艸墓古墳より古く位置付けられ、7 世紀前半代の築造と考えられる。

横穴式石室で羨道と玄室に石仏、石の井戸。

（10）艸墓古墳（カラト古墳）

副葬品不明のために、築造時期は限定できないが、石室が、岩屋山式石室の変形である点、石棺の形式などから、7 世紀中頃に築造された方墳と考えられる。

一辺約 27.5 メートルの方墳で、南東側に横穴式石室が開口している。石室は石材 1 石を並列して構成する事を基本としており、大型の石材を使用していることが特徴である。玄室中央部には、竜山石製の刳抜式の家形石棺が一基安置されている。

阿倍氏について

古代の豪族。安倍とも書く。『日本書紀』では孝元天皇(こうげんてんのう)の皇子大彦命(おおひこのみこと)を祖とするが、『古事記』では大彦命の子建沼河別命(たけぬなかわわけのみこと)を祖としている。崇神天皇(すじんてんのう)10年に大彦命を北陸に、武渟川別(たけぬなかわわけ)を東海に派遣したり、崇峻天皇(すしゅんてんのう)2年に阿倍臣(あべのおみ)を北陸道にやって越(こし)などの国境をみさせたこと、阿倍氏を伴造(とものみやつこ)とする丈部(はせつかべ)が東国、北陸に多く分布することからみると東国、北陸の経営と関係深い氏族のようである。

また同族に供膳(きょうぜん)と関連のある氏族をもつことや伝承などから、後の大嘗祭(だいじょうさい)に移行した新嘗(にいなめ)、服属儀礼に従事したことが知られる。

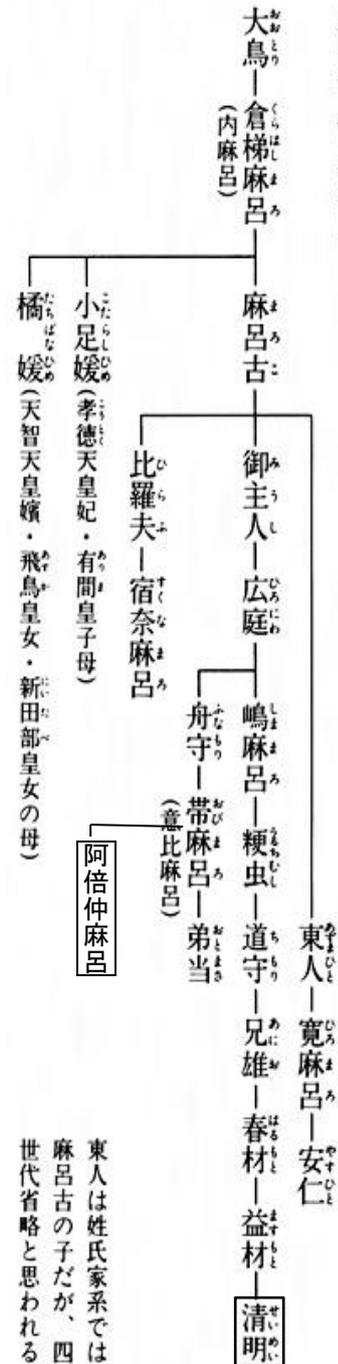
宣化朝(せんかちょう)以降、蘇我大臣(そがのおおみ)のもとで大夫(まえつきみ)として政治に参加し、大化改新のときに阿倍倉梯麻呂(あべのくらはしまろ)は左大臣となっている。

684年(天武天皇13)に朝臣(あそん)の姓(かばね)を賜った。

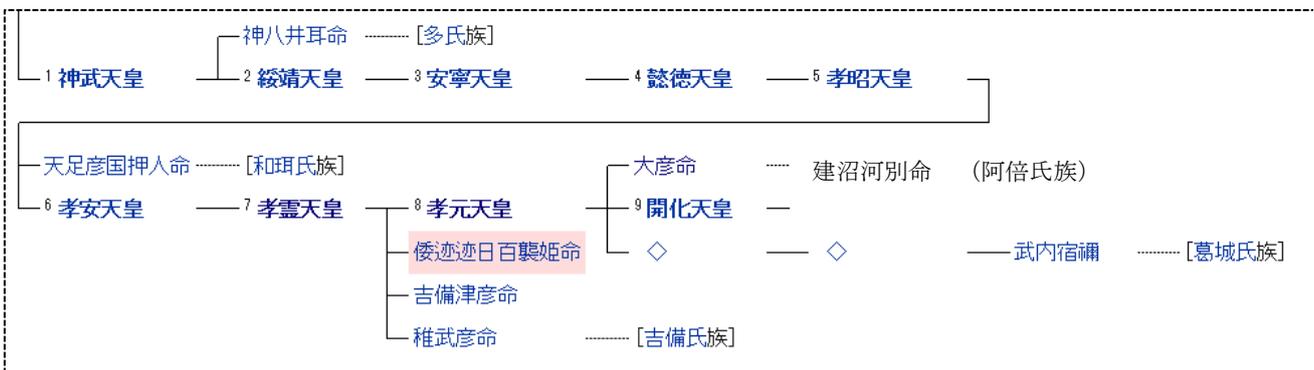
布勢(ふせ)、引田(ひけた)、許曾倍(こそべ)、狛(こま)などのいくつかの家に分かれる。有名な阿倍比羅夫(ひらふ)は引田氏系の人物であり、平安時代の陰陽家(おんみょうけ)の阿倍氏は布勢氏の流れをくむといわれる。

[志田諄一]

阿倍氏 / 略系図



東人は姓氏家系では麻呂古の子だが、四世代省略と思われる



阿倍仲麻呂

第10次遣唐使船4隻は、天平勝宝五年（753年）11月16日、長江下流の蘇州黄泗浦（こうしほ）を出港し帰途についた。

第1船には正使藤原清河と阿倍仲麻呂、第2船に副使大伴古麻呂と鑑真、第3船に副使吉備真備と普照がそれぞれ乗船していた。

藤原清河を送る任を帯びて、36年ぶりに帰国を許された仲麻呂が心の昂揚を詠んだ歌がある。
あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも（古今和歌集巻9 羈旅）

阿倍仲麻呂は、中務大輔 阿倍船守の長男として大和に生れ(698年)、若くして学才を謳われた。

717年第8次遣唐使（多治比縣守）の留学生として入唐し、同期の留学生には吉備真備や玄昉や井真成（734年34才唐で病死）がいた。

唐の大学に学び、科挙に合格、唐朝の諸官を歴任し、長安で李白・王維ら文人と交流した。同期の吉備真備、玄昉らは天平六年(734)末、第9次遣唐使（多治比広成）と共に帰国したが、仲麻呂は玄宗皇帝から帰国を許されず唐に留まった。

高級官僚で詩人、書家、画家である王維は、仲麻呂（中国名朝衡、晁衡）が日本に帰る際に、送別の酒宴を開き、互いに「詩」を交わしている。

『送秘書晁監還日本國』 王維

積水不可極	積水 極むべからず
安知滄海東	いつくんぞ知らん滄海の東
九州何處遠	九州 何れの処か遠き
萬里若乘空	万里空に乗ずるがごとし
向國惟看日	国に向かひて惟だ日を看
歸帆但信風	歸帆 但だ風を信ず
鰲身映天黑	がうしん 天に映じて黒く
魚眼射波紅	魚眼 波を射て紅なり
鄉樹扶桑外	郷樹 扶桑の外
主人孤島中	主人 孤島の中
別離方異域	別離 方（まさ）に異域
音信若爲通	音信、いかんして通ぜん

『衛命還國作』 朝衡（阿倍仲麻呂）

衛命將辭國	命を衛み將に國を辭せん
非才忝侍臣	非才ながら待臣を忝くす
天中戀明主	天中に明主を戀しがり

海外憶慈親
伏奏違金闕
駢駢去玉津
蓬萊郷路遠
若木故園鄰
西望懷恩日
東歸感義辰
平生一寶劍
留贈結交人

海外にあれば慈親憶う
伏奏して金闕を違り
駢駢は玉津を去らんとす
蓬萊まで郷路は遠く
若木とは故園の鄰りなり
西を望んで恩をしのぶ日
東へ歸つて義に感ずる辰
平生ただ一振りの宝の劍
交を結びし人に留め送る

第1船（清河正使、仲麻呂）は、11月21日沖繩に到達。12月6日沖繩を出航するも座礁。自力で離礁したものの東シナ海の季節風に押し流され安南（現在のベトナム）に漂着。

現地人の襲撃を受け、180余人の乗組員のうち生き残ったのが10余人という悲惨な体験をするが、仲麻呂や清河は難を逃れ、2年後に長安に辿り着いた。この年、安祿山の乱（755年）が起こり、藤原清河迎への遣唐使（高元度）が渤海経由で到来するが、唐朝（肅宗）は行路が危険である事を理由に清河、仲麻呂の帰国を認めなかった。

第2船以下は難航海の末、帰国を果たした。玄宗が出国を禁じた鑑真は、第2船（副使大伴古麻呂）に便乗（密出国）し、坊津（鹿児島坊町秋目浦）に漂着。66才、6度目にして日本への渡航に成功し、仏教界に戒律を伝えた。

仲麻呂（晁衡）の海難を伝え聞いた李白は、七言絶句「哭晁卿衡」を作つて哀悼したという。

日本晁卿辭帝都	日本の晁卿帝都を辭し
征帆一片遶蓬壺	征帆一片蓬壺をめぐる
明月不歸沈碧海	明月は帰らず碧海に沈み
白雲愁色滿蒼梧	白雲愁色蒼梧に満つ

帰国を断念した仲麻呂は、唐で再び官途に就き、天平宝字5年（761）から6年間ハノイの安南都護府に在任し、天平神護2年（766）安南節度使（正三品）に任じられた。宝龜元年（770）、在唐54年、73歳で長安で客死した（贈従二品）。その知らせは778年、第12次遣唐使により故国にもたらされた。

(11) 外山茶臼山古墳(とびちやうすやまこふん)

前方部が直線的な柄鏡[えかがみ]の形をしていることから、前期古墳でも古い時代のものであると考えられる。竪穴式石室は朱塗りの板岩を積んだ豪壮なもので、出土品には玉杖や玉葉、鉄刀、鉄剣などがある。墳丘の規模や副葬品などから大王級の人物が葬られたと推測されている。4世紀初頭の築造と考えられる。丘尾切断によって築造された前方後円墳。埋葬施設は竪穴式石室であり、墳丘には葺石をめぐらせていたようである

古墳時代前期の前方後円墳-全長 207m、後円部径 110m・高さ 21.2m、前方部幅 61m・高さ 11m

後円部中央の竪穴式石室-全長 6.75m・幅 1.13m・高さ 1.6m、天井石 13 枚

昭和 24 年の秋と翌 25 年の夏に発掘調査が行われた結果、尾根の末端を切断して築造された古墳であると判明した。後円部を北に、前方部を南に向けた南北形式に築造されており、前方部が細く長い、柄鏡式の形態をなしていたという。(柄鏡とは、柄のついている金属鏡のこと)

また、石室の中はすべて、天井石に至るまで、多量の朱で塗られていた。加えて、出土品がすばらしく、玉杖・玉葉・勾玉・五輪形石製品等、相当数にのぼる。なかでも立派な碧玉で造ってあった玉杖は、発掘者は勿論、一目見たもの皆一様にその美しさにうたれた。これまでに、何回か大規模な盗掘にあっていたにもかかわらず、まだこれだけ豊富な、しかも貴重な副葬品の出土品をみた事は、考古学界のためばかりでなく、我が国の文化の古さと高さに自信を持ったことであろう。

これらのことから、この古墳は、この地方の王者の墓であろうと考えられている。土地では、饒速日の命、あるいは長髓彦の墓と伝えられている。

後円部の中央には、長さ 6.75m、幅は北小口で約 1.28m、南小口で約 1m、高さ平均 1.60mの竪穴式石室がある。「石室を構成する大小石材の全てを全面的に多量の朱彩があり、壁面として露れない部分にまで塗沫され、全く美麗」な石室である。床面は、全面板石で粘土床は無く、敷石上に直接置かれた木棺は現存長 5.19m、床板の厚さは 22cm あり「巨大な石室に相応しい巨大な木棺」である。材質は「トガの巨木」と鑑定されている。石室内はすでに盗掘にあっていて、副葬品はいずれも断片になり、現位置を保つ遺物はなかったものの、鉄鏃は両小口に散乱し、玉杖は主に北小口に、そして鏡片は北小口の土砂に多数含まれていた。

(12) メスリ山古墳

王権や軍事権をも掌握した人物が被葬者として推定。周囲に古墳群を作った阿倍氏の祖「オオビコ」の墓説も考えられる。4世紀前半の前方後円墳である。

全長 244 メートル、後円部径は 128 メートルあり、磐余地域の前期古墳として最大の規模を誇っている。墳丘には葺石がめぐり墳頂部には方形に大型円筒埴輪が立てられていた。石室は 2 つあり、第 2 石室からは多量の武器類が未盗掘で発見され、王権や軍事権も掌握した人物が被葬者として推定される。

この巨大な特殊円筒形埴輪の模型が桜井市民会館ロビーに展示されている

1959～61 年にやはり橿原考古学研究所により発掘調査された。後円部墳頂には二重に円筒埴輪をめぐらした方形区画があり、その下部中央に竪穴式石室(主室)、さらに東寄りにいま一つの竪穴式石室(副室)が並列して設けられていた。主室はすでに盗掘されていたが、銅鏡片、玉類、石製品、刀剣類などが出土した。副室は未盗掘で、玉杖のほか、膨大な量の各種武器・農工具類などが納められており、副葬品専用の施設と考えられている。

奈良盆地東南部の初期倭国王墓群

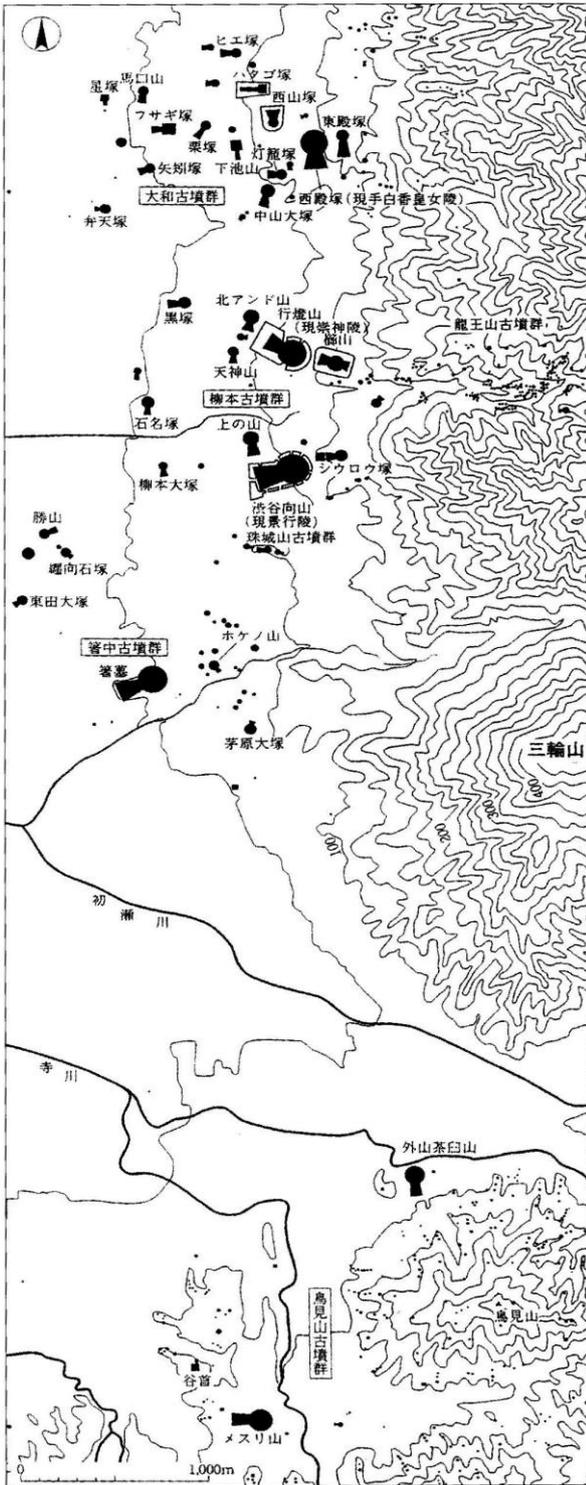


図4 奈良盆地東南部（オオヤマト古墳群）
における大型古墳の分布

<造営の順序>

- ① 箸墓古墳（墳丘長280m） → ② 西殿塚古墳（現手白香皇女衾田陵240m）
 → ③ 外山茶臼山古墳（200m） → ④ メスリ山古墳（230m）
 → ⑤ 行燈山古墳（現崇神天皇陵240m） → ⑥ 渋谷向山古墳（現景行天皇陵310m）

<邪馬台国連合から初期ヤマト政権へ 白石太一郎>より抜粋



168 墳丘全景（北西上空より 昭和29年撮影）

外山茶臼山古墳（北西上空より 昭和29年撮影）



177 墳丘全景（北西上空より 昭和36年撮影）

メスリ山古墳（北西上空より 昭和36年撮影）

履中、清寧、用明の宮伝承地および吉備池廃寺跡、磐余池跡概略図

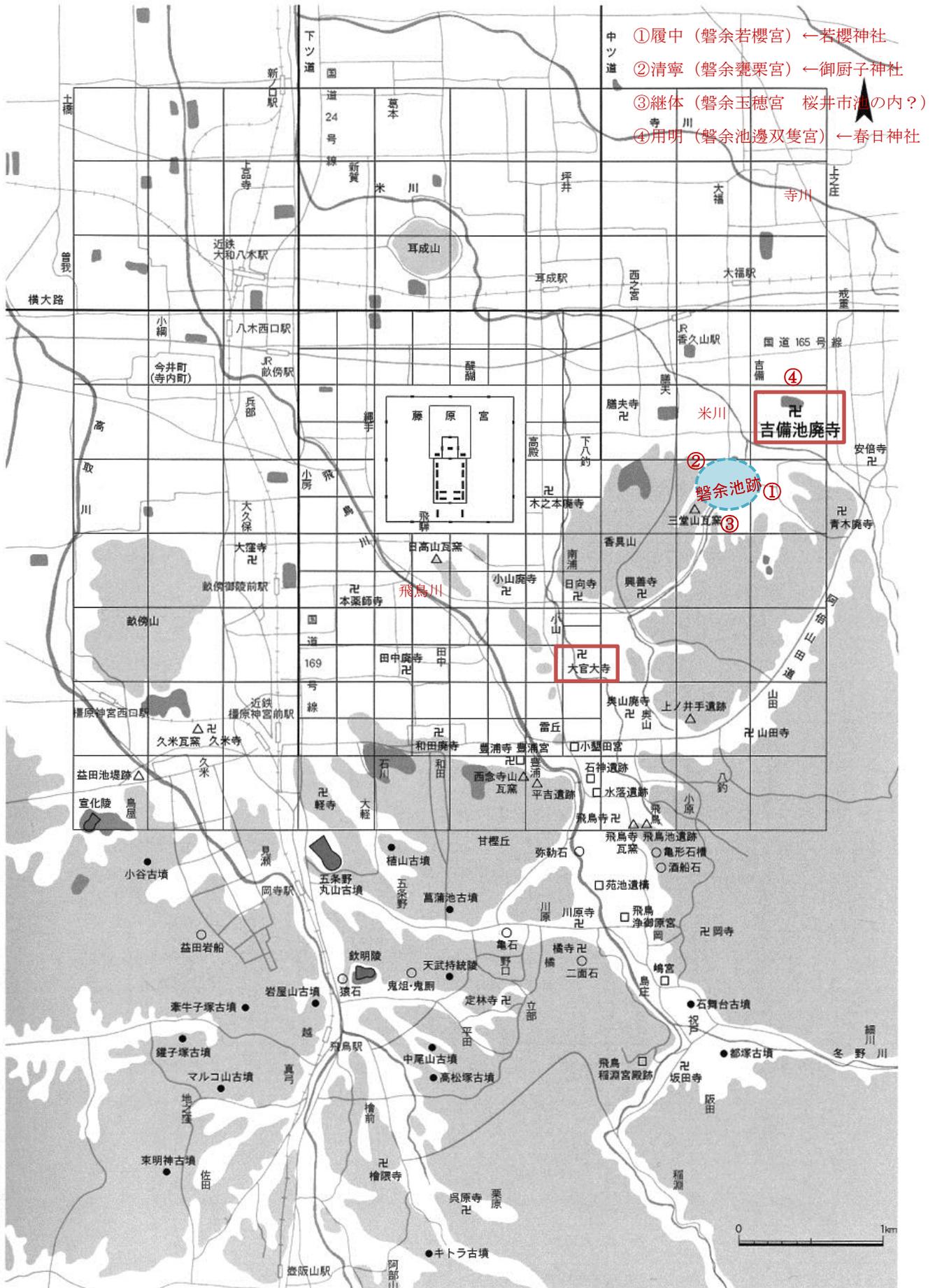


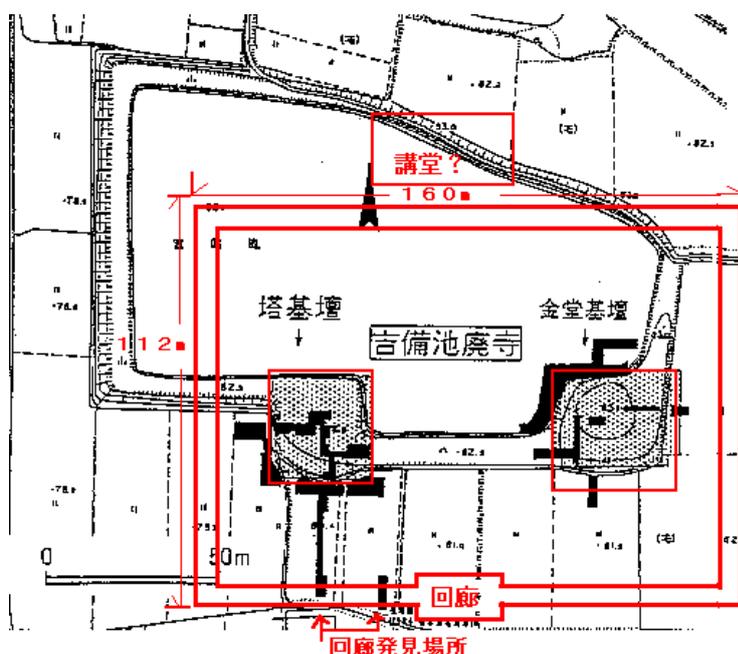
Fig. 1 飛鳥・藤原京周辺の遺跡 1:40000

(13) 吉備池廃寺（百濟大寺）

吉備池廃寺、巨大回廊跡を発見 最古の「法隆寺式」伽藍配置 (平成10年3月25日 奈良新聞)

高さ100m級と推定される塔の壇跡が見つかり、639年に舒明天皇が造営した「百濟大寺」ではないかとされる吉備池廃寺（奈良県桜井市吉備）で、金堂や塔の周囲を囲む回廊の跡が見つかったと、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部と同市教委が24日発表した。同廃寺は左右に並んだ金堂と塔を回廊が囲む「法隆寺式」伽藍配置の最古の例になるという。また回廊が一辺100m以上と規模が大きいことから、同廃寺が、巨大な寺とされる百濟大寺とする説が一層強まったとされる。

今回の調査で、塔基壇の中心部から約50m南で、幅約50cmの溝2本が東西に通っているのが見つかった。溝の間（幅約6m）に土をつき固めた跡があり、この跡が同廃寺の南側回廊跡の一部で、2本の溝は回廊わきに掘られた排水溝と判断。回廊と金堂跡の中心との距離から回廊の規模は法隆寺西院伽藍の1.8倍にあたる南北112m、東西も160mになると推定した。日本書紀で舒明天皇の築造とされる百濟大寺は「未完成の可能性もある」という説があるが、同調査部の猪熊兼勝部長は「回廊までであるのに、寺全体が未完成だったとは考えにくい。塔や金堂、回廊の発掘成果から、百濟大寺は吉備池廃寺で間違いない」と話している。



百濟大寺⇒高市大寺⇒大官大寺⇒大安寺への沿革

<629年 舒明天皇 飛鳥岡本宮遷都>

(舒明11年) 秋7月に詔して曰く「今年大宮及び大寺を造作らしむ」とのたまふ。則ち百濟川の側を以って、西の民は宮造り、東の民は寺を作る。……(日本書紀巻第23)

百濟大寺 (639年 舒明天皇)

<673年 天武天皇 飛鳥浄御原宮遷都>

高市大寺 (673年 天武天皇、高市に移築、677年 大官大寺に改称)

<694年 持統天皇 藤原京遷都>

大官大寺 (702年 文武天皇 藤原京に移築拡幅 711年 焼失?)

<710年 元正天皇 平城京遷都>

大安寺 (716年 平城京左京六条四坊に移築)

百済大寺・高市大寺・大官大寺・大安寺の略史 (大安寺ホームページより抜粋)

大安寺は、聖徳太子が平群郡額田部に熊凝道場を創建したことに始まります。やがて百済大寺、高市大寺、大官大寺と名と所を変え、平城京に移って大安寺となりました。この間の事情を『三代実録』元慶四年（880年）冬十月の条には次のように記します。

「昔日、聖徳太子平群郡熊凝道場を創建す。飛鳥の岡本天皇、十市郡百済川辺に遷し建て、封三百戸を施入し、号して百済大寺と曰ふく。子部大神、寺の近側にあり、怨を含んで屢々堂塔を焼く。天武天皇、高市郡の夜部村に遷し立て、号して高市大官寺といい、封七百戸を施入す。和銅元年平城に遷都し、聖武天皇詔を下して律師道慈に預け、平城に遷し造らしめ、大安寺と号す」

天平十九年（747年）に作成された「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」（重要文化財・文化庁蔵）には、そもそも百済大寺の造営は、聖徳太子の遺言によるものであったとされております。

舒明天皇がまだ田村皇子と呼ばれた頃、聖徳太子の病が重くなった為、推古天皇は皇子を見舞いに遣わしました。太子は、自らが熊凝村に建てた精舎を、御世御世の天皇のために大寺となし永く三宝を伝えてほしいと皇子に遺言されました。太子の付嘱をうけて皇子は舒明天皇となった時、百済川の畔に熊凝精舎を移し建て百済大寺とされました。

これは九重の塔を持つ当時最大の大規模な伽藍であったとされます。ところが舒明天皇の時代には完成を見なかったようで、造立工事はその後、皇后の皇極天皇に引き継がれました。これには当時最盛期にあった蘇我氏はまったく関与していないようであり、太子の遺志を承けて天皇家が威信をかけて造営した最初の官立寺院であったといえます

百済大寺は今日までその所在がはっきりせず、広陵町の百済寺が比定されてもおりました。しかし数年前に桜井市にある吉備池から巨大な寺跡が発掘され、吉備池廃寺と名付けられました。その群を抜いた規模からこれが従来云われてきた幻の大寺、百済大寺に違いないと考えられています。

時は巡り、皇位継承問題に端を発し、国内を二分しての争乱となった壬申の乱に勝利した天武天皇は、即位後まもなく同天皇二年（673年）には「高市大寺」の造営にとりかかります。

高市大寺は、百済大寺を新たに高市の地へ移し建てたものでした。高市は今日の明日香村が高市郡です。しかし移建された高市大寺がどこであったかという問題も諸説があり、今後の研究課題となっています。

天武天皇はさらに、同天皇六年（677年）に高市大寺を大官大寺と改めました。「大寺」とは私寺に対する官寺を意味しています。また、「おおつかさのおおてら」と訓じられ、大官=おおつかさとは天皇をさす言葉でもあります。すなわち天皇自らの寺として、国の安泰と人心の安寧を祈る公の寺という意味でもあり、また全僧尼を統制する僧綱所でもありました。

大官大寺は川原寺、飛鳥寺の三大官寺の首座として重きをなしますが、伽藍の完成には至らなかったようで「大安寺資財帳」には天武天皇不予の時、大寺の造営を三年延長する旨の誓いをたてたところ、天皇の寿命も三年延びたと云う記事を伝えています。

天武天皇の崩御後、その遺志は持統天皇・文武天皇へと引き継がれます。大官大寺は再び場所を移して、現在の明日香村大字小山、香具山の南約700メートルの地に造立されました。藤原京の造営に伴い、造宮と造寺の一環であったとも考えられます。その跡は昭和49年以降の発掘調査によって巨大な金堂、講堂、塔などの遺構がしめされ、いにしえの大寺建立の気宇の壮大さが偲べれます。ここは国の史跡に指定されています

和銅三年（710年）都は藤原京から平城京に遷され、大安寺（大官大寺）もそれにともない遷寺しました。造営の時期には諸説ありますが、養老二年（718年）に唐より帰朝した遺唐僧道慈の勾当によると考えられ、本格的な工事は天平元年（729年）以降とみられています。

「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」には、その実状が詳しく記されています。

平城京左京の六条と七条4坊の地に15の区画(坪)に分けられた広大な寺域を占め、金堂・講堂を中心とする主要伽藍には三面僧坊が建ち並び、その中に887人もの僧侶が居住して勉強修行に励みました。

南大門は平城京の朱雀門と同じ規模を持つ重層の楼閣で、そのはるか南に七重の塔が二基、東塔、西塔と聳えていました。尤も塔院は天平十九年当時にはまだできていなかったようで、資財帳にその記載はありません。塔院が完成した時期は明らかではありませんが、残された基壇の規模から推測すると70メートルを超える巨大な塔がたったようでもあります。

金堂の本尊丈六釈迦如来像をはじめとして、諸堂には菩薩像、四天王像、十大弟子や八部衆像などおびただしい数の仏像がまつられ、大般若四处十六会図、華嚴七处九会図などの画像、繡帳がきらびやかに堂塔を荘厳し、金剛般若経、金光明経、大般若経、一切経など膨大な数の經典が経蔵に収蔵されていたようです。

その当時居住した数多の学僧は歴史に名を留める人物も多く、三論を伝えた道慈の活躍は後に大安寺を三論宗の本拠とし、審祥は華嚴の大家として知られました。律、法相、俱舎、成実といった南都六宗が共に学ばれ、さしずめ仏教の総合大学の様相を呈していました。

海外の渡来僧も多く、東大寺大仏開眼の大導師をつとめたインド僧菩提僊那(ボダイセンナ)、呪願師をした唐の道璿(どうせん)、さらに盛儀に華を添えたのは、林邑楽を披露した林邑僧(ベトナム)の仏哲でした。共に大安寺に居住し、生涯を日本で過ごした人たちです。

前後しますが、聖武天皇は伝戒の師(授戒の導師となる高僧)を求め、大安寺の普照(ふしょう)と興福寺の栄叡(ようえい)が唐に遣わされました。天平五年(733年)四月、二人は遣唐船で難波津を出航して長安に達し、先の道璿(どうせん)、菩提僊那、仏哲等に渡日を要請。その来朝がかないました。さらに十年、明師を求め、ついに楊州の大明寺に鑑真を訪ねます。その招請に応じて鑑真和上は自らの渡日を決意されたと云います。

鑑真和上の渡航は困難を極め、五度の失敗、六度目にしてようやく日本に到達することになります。その間十二年が経過し、鑑真和上は視力を失い、栄叡は病を得て亡くなってしまいました。一人普照が和上一行二十五名と共に歎喜の帰還を果たしたのでした。

和上は天平勝宝六年春、大仏殿に戒壇を設け、聖武・孝謙天皇をはじめ、衆僧・文武百官など四百余人に戒を授けました。鑑真和上の来朝は授戒という仏教の根幹に寄与するところが大きく、それだけに大安寺僧普照の功績を忘れることはできません。

(14) 若櫻神社(高屋安倍神社)

神社名「稚櫻」の由緒

日本書紀によると「第十七代履中天皇三年(四〇一年)冬十一月六日 天皇が両枝船を磐余市磯池(神社の東側にあった池)に浮かべて遊宴されたとき 膳臣余磯(かしわてのおみあれし)が酒を奉った。その酒盃に櫻の花びらが散って来た。

天皇はたいへん不思議に思われ、物部長真胆連をよんで「この花は、季節外れに珍しく散ってきた。どこからだろうか探してこい。」といわれた。長真胆連は花を探したずねて掖上室山で花を手に入れて奉った。天皇はその珍しいことを喜んで宮の名とされた。磐余稚櫻宮の由緒である。長真胆連は本姓を改めて、稚櫻部造とし膳臣余磯を名づけて稚櫻部臣(わかざくらべのおみ)という。」と記されている。

稚櫻神社の御祭神

出雲色男命「新撰姓氏録」によると物部氏の御先祖の饒速日命の三世の子孫が出雲色男命で、また、右の由緒にてでくる長真胆連(稚櫻部造)の四代前の祖先にもあたる。「旧事本紀」に出雲色男命は懿徳天皇の御代に大夫になり次に大臣となる。大臣という号はこの時からできた。」とある。

去来穂別命 いざほわけのみこと(履中天皇) 第十六代仁徳天皇の皇太子で「日本書紀」の履中天皇紀に「元年(399)春二月一日皇太子(去来穂別命)は磐余稚櫻宮で即位された。」とあり、「二年十一月に磐余池を作られた。」と記されている。 気長足姫命(神功皇后) 第十四代仲哀天皇の皇后で、天皇がお崩れになったので、天皇にかわって政務をされる摂政となられた。「日本書紀」神功皇后摂政紀に「三年春正月三日誉田別皇子(後第十五代応神天皇…八幡大神)を立て皇太子とされた。そして磐余に都をつくられた。(これを若桜宮という。)と記されている。

(15) 磐余池跡

第17代履中天皇の宮、磐余稚櫻宮がこのあたりで営まれ、この池で船をうかべて遊宴されたことが、日本書紀に記述がある。

大津皇子が刑死される時「ももづたふ磐余池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」と歌ったのはこの磐余池のあたりである。

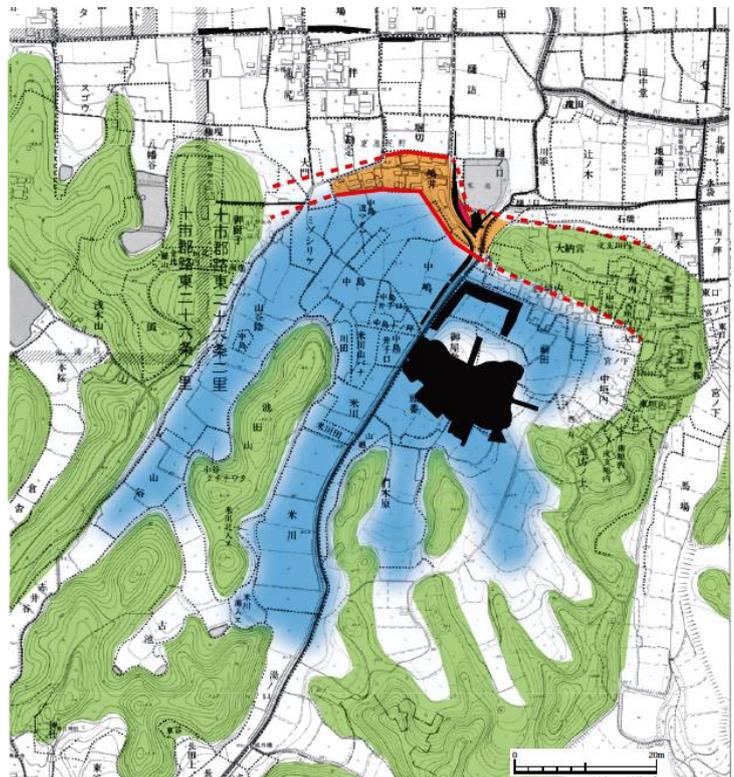
大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時に、大来皇女の哀傷みて作らず歌二首
うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟背と我が見む(万2-165)
磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在りと言はなくに(万2-166)

東池尻・池之内遺跡、

大藤原京左京五条八坊の発掘調査

(橿原市教育委員会 文化財課)

H26年2月3日～3月19日



東池尻・池之内遺跡 池・堤復元図

「磐余池」の場所は桜井・若桜神社西側付近 奈良県立図書情報館の千田館長が新説 (産経ニュースより)

日本書紀に記され、池の近くに用明天皇の池辺双槻宮などが築かれたとされる「磐余池 (いわれいけ)」の場所について、県立図書情報館の千田稔館長 (歴史地理学) が、古文書の記録や米軍が終戦直後に撮影した写真などから、桜井市谷の若桜神社西側付近にあったとする考え方を、斑鳩町で開かれた講演会で明らかにした。磐余池の場所については、用明天皇時代の6世紀後半ごろの人工の堤の遺構や、それ以前の建物跡が見つかった橿原市東池尻町付近の「東池尻・池之内遺跡」とする見方が通説。だが千田館長は「古い時代の池跡だが、磐余池と証明できていない」としている。

若桜神社は桜井駅の南約500メートル。日本書紀履中2年11月の条には「磐余池をつくる」という記録があり、履中天皇の宮 (宮殿) は磐余稚桜宮とされる。用明天皇の池辺双槻宮もこの池のそばにあったとみられ、磐余池は古代では有名な池だった。

千田館長は講演で、平安時代の公式文書の延喜式 (政府がつくった法律を施行するための規則集) をもとに、「履中天皇の磐余稚桜宮の跡に若桜神社が創祀されたと考えられる」と説明。遺構は見つかっていないが、米軍が終戦直後に撮影した航空写真では「若桜神社の西側に池の堤の痕跡とみられるラインが観察できる」としており、「一帯に磐余池があったと考えられる」とした。また、千田館長は桜井市戒重付近 (若桜神社の北西側) に住まいがあったとされ、謀反の罪で刑死する大津皇子の挽歌が磐余池の堤で詠まれていることをあげ、「池の場所が若桜神社の西側付近であることを補強する材料だ」とした。千田館長は約30年前から、磐余池が若桜神社の西側付近であると著書などで主張。「池の場所はかつて、『どろどろした状況だった』という言い伝えがあり、馬の蹄 (ひづめ) のような形だった可能性がある。今は都市化で見えなくなっているが、若桜神社の西側にれっきとした池があったと思う」と述べた。

(16) 御厨子神社

御厨子山北辺に鎮座。もと水尻神社と書き、根裂神・安産霊神 (火産霊神) を祀っていたが、御厨子山妙法寺の鎮守八幡神社を合祀、社名を改めた (磯城郡誌)。旧村社。水尻は磐余池の樋口 (水司) の義か。また北西方に膳夫村 (現橿原市) があり、いわゆる御厨子所 (内膳司) の関係語か。境内は清寧天皇磐余甕栗宮跡の伝承地。南東にある御厨子山妙法寺は高野山真言宗で、吉備真備建立と伝える。本尊十一面観音。続に御厨子観音と称し、境内からは飛鳥時代の古瓦が出土する。

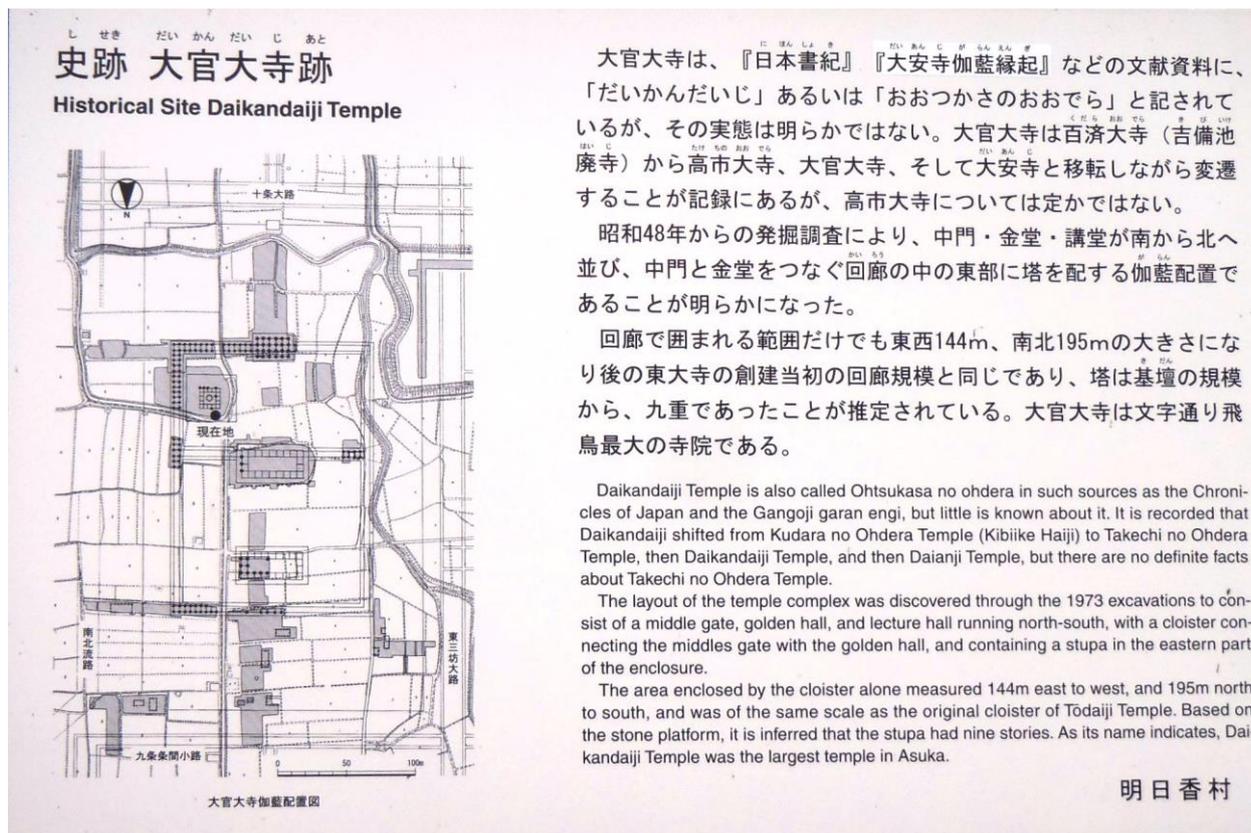
「康応元年 (1389) 壇場ヶ森鎮座水尻神社祭神根裂神安産霊神二柱」と記された棟札が有ったとされ、南北朝ごろまでは根裂神と安産霊神の二柱が祭神だったようです。現在保存されている最古の棟札は応仁2年 (1468) の銘があり八幡神を主神として、根裂神と安産霊神を随神として位置付けています。八幡神社は元は御厨子山「妙法寺」の鎮守社でした。

祭神； 根析神 (根裂神・ねさく・根を裂く威力のある神で、生気を授ける神)、安産霊神 (安産の神)、菅田別命 (八幡大神) 境内の石神； 石析神 (いわさく) 根析神と同じく生気を授ける神。

(17) 御厨子観音 (妙法寺)

御厨子 (みずし) 観音妙法寺は、吉備真備が、入唐留学によって学芸を修めるとともに、唐から無事に日本に帰ることができたことに感謝し、735年 (天平7年) に善覚律師 (吉備真備の子) に命じて観音堂を創建させたことに始まります。吉備真備が書いた「大般若経 (だいはんにゃきょう)」は、現在も奈良国立博物館に保管されています。

(18) 大官大寺跡



創建時の伽藍は、奈良文化財研究所の昭和48年から同57年までの10年に及ぶ発掘調査によって、以下のことが明らかになっている。

① 寺域の大きさ

	大官大寺	飛鳥寺
東西 (m)	205	210
南北 (m)	354	290

② 中心伽藍の大きさ

	大官大寺	飛鳥寺	川原寺
東西 (m)	144	112	82
南北 (m)	197	90	129
面積 (㎡)	28,368	10,080	10,578

③ 金堂の大きさ

	大官大寺	大極殿 (藤原京)	川原寺	山田寺	法隆寺
東西 (m)	45	45	16.8	14.7	14
南北 (m)	21	21	12	11.6	10.6

④ 塔の初層一辺長の大きさ(但し、「国分寺七重塔」は相模国分寺の事例)

	大官大寺 (九重塔)	東大寺 (七重塔)	大安寺 (七重塔)	国分寺 (七重塔)	興福寺 (五重塔)	山田寺 (五重塔)	法隆寺 (五重塔)
初層一辺長 (m)	15	16.3	12	10.8	8.8	6.6	6.3

(19) 山田寺跡

大化改新時の右大臣蘇我倉山田石川麻呂により皇極2年（西暦643年）に建立されたと伝えられる。伽藍配置は四天王寺式で、国の特別史跡として整備されている。

現在、奈良の興福寺宝物館に収納されている「仏頭」は、この寺にあった丈六薬師仏である。また、史跡整備に伴う発掘調査では、東廻廊が倒壊したままの状態で見出されており、この連子窓は、山田寺跡から約300メートル西にある飛鳥資料館に展示されている。

<完成までの経緯> 当寺院は、下記の通り、建立途中で発願者である蘇我倉山田石川麻呂が謀反の疑いをかけられ自害し、約14年間伽藍整備が中断するという紆余曲折を経て、着工からおおよそ40年の長期を要して伽藍が完成したという特異な歴史を持っている。

- ・大化4年(648) この頃までに金堂が完成。
- ・大化5年(649) 石川麻呂、蘇我日向の讒言により、一族が当寺院で自害。
- ・天智天皇2年(663) 塔建立に着手。
- ・天武天皇5年(674) 塔完成(五重塔)
- ・天武天皇7年(676) 丈六仏像鑄造開始
- ・天武天皇14年(683) 丈六仏像開眼供養、この頃伽藍全体がほぼ完成したと推定されている。

<完成後の伽藍配置> 伽藍配置は、下の鳥瞰図の通り講堂が中門に取り付く廻廊の外側にある点が異なるものの、基本的には塔、金堂、講堂が一直線上に並び四天王寺式といえる。



(現地の文化庁作成パネルより)

<蘇我倉山田石川麻呂>

蘇我倉麻呂の子。645年に蝦夷・入鹿暗殺計画に参画し、娘造媛を中大兄皇子の妃にいれ、これを助け改新政府の右大臣となる。異母弟日向の為に讒せられ、皇太子中大兄皇子に異心ありとされた。

又積明を拒んだ為天皇の兵に攻められ山田寺において家族と共に自害した。間もなく疑いがはれ、日向は筑紫へ流された。その娘造媛、姪娘は天智天皇の嬪で、それぞれ持統・元明女帝の生母である。

(18) 飛鳥資料館（入館） 65歳以上無料

以上

※橿原神宮ゆきバス（飛鳥資料館前発） 14：26 15：26 16：26

